

一 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

ソクラテス（前四七〇～三九九年）はあるとき、弟子のカイレフオンを介して、デルフォイの神託所より「ソクラテス以上の賢者はいない」という託宣を受けた。この神託に直面してソクラテスはこう自問する。

「いったい、神は何を言おうとしておられるのか。なんの謎をかけておられるのか。なぜなら、私は自分が知恵のある者ではないことを自覚しているのだから」（『ソクラテスの弁明』二一B）そこで、この謎を解くことが神から自分に課せられた天職であるとソクラテスは理解した。なぜなら、神はけつして偽りを言うはずがないのだから、無知なる者ソクラテスを「最高の賢者」と語るこの一見矛盾的な神託のうちには、何か深い意味が隠されているにちがいないからである。こうして、思い悩んだ末に、彼は世に賢明のほまれ高い人々を歴訪し、彼らから賢さを学ぶことにより、この謎の意味を解こうとしたのであった。この対話活動の開始が彼の哲学の出発点であり、また、彼を死罪にまで追いこむ運命の第一歩であった。

さて、対話活動の結果、やがて彼が発見したことは、賢いと思われる人々は、自分でもそう思い、他人にもそう思われているが、事実は少しも賢くないということであった。すなわち、この謎によって神アポロンが教えようとしたことは、――

「ということだったのである。」

A、「知恵」という名のもとに、ソクラテスが問題にしていたことがらは何であったのか。

それは、人間の生き方についての知恵、「いかに生きるべきか」という問いに対する解答である。『パイドン』篇でソクラテスは自分の知的遍歴を語っているが、それによれば、彼もまた若い頃は自然学に熱中したそうである。それは、自然学者が事物の生成消滅の真の原因を教えてくれると

信じたからである。

だが、ソクラテスが彼らの説明の中に見出したものは、事物が事実かくかくの状態にあることの記述であって、何故そうであるかということの理由ではなかった。たとえば、ソクラテスが牢獄の中に座っていて逃亡しないことを、彼らは、骨と腱がこれこれの状態にあるから、などと説明するのである。

だが、ほんとうの理由は、ソクラテスが、いかなる判決であるにもせよ、国法にのっとって下された判決に従うことが正しいと考えているからなのである（『パイドン』九八E）。
B、ソクラテスの行動のほんとうの理由は彼の思想なのである。

宇宙の秩序についても同様である。自然学者はただ原初の渦巻きとか元素の相互作用とかについて語るだけで、宇宙をこのような秩序のうちに統括している「善」なる力については思ってもみないのであった。

そこで、ソクラテスは自然学に絶望し、人々との反駁的対話というロゴスの道によって「善」の探求へ向かったという。あらゆる知識の根底に「善」についての認識がなければならぬというソクラテスのこの考えは、いわば、理論理性に対する実践理性の優位を主張する革命的な思考の転換だった。それは、ひたすら自己の外なる自然界のみを眺めていた理性が、一八〇度向きを変えて自己自身を眺めはじめた一瞬であり、これによって、「哲学は天空から人間界へと呼び降ろされ」（キケロ『トウスクラム論叢』第五巻四の一〇）、人生と善悪が本来的に問題とされることが可能になったのである。

ソクラテスの哲学の方法は反駁的対話である。反駁的対話とは基本的に公共の場における公開の対話である。

ソクラテスの哲学の問題は「人間

I

であるから、対話の主題はいつも

正義、節制、勇氣、知恵、敬虔などの徳である。ソクラテスはこれらの徳が「何であるか」と問う（ちなみに、ソクラテスは善についての無知を表明しているのであるから、自分から提出すべき見解をもっていない）。

そこで、問われた対話の相手は、それについての自分の見解を述べる。このとき、その見解が正しいかどうかを吟味するのだが、その吟味の方法は、ソクラテス自身も自明と思い、対話の相手もその自明さを承認せざるをえないような、なんらかの基本的命題と、その対話相手の見解が矛盾しないかどうかを検討するのである。その結果、両方が矛盾すれば、対話相手は反駁されたことになる。しかし、ここでだれか新たな対話相手が出現して、その基本的命題に疑義を提出すれば、ここからふたたび一段と深まった反駁的対話が始まるのである。

こうして、この反論と再反論のプロセスは、根拠の方向へと深化しつつも止むことなく進行し、対話はたいていは明確な結論をえないまま終結する。もともと対話による基礎づけとは、「思いなし」と「思いなし」との衝突を媒介にしての説得であるから、対話がかりに成功裡に終結したとしても、それは主観的な高度の蓋然性という域を越えて脱出できないと言わねばならぬ。そこに、対話の彼方への賭けまたは信仰という問題がおこってくるが、それは刀折れ矢尽きるまで対話の道を歩んだ後のことである。

こうして、ソクラテスはロゴスによる基礎づけを究極根拠として生きてきたといえる。彼は「国家の崇敬する神々を拝まず、青年を腐敗させる」という罪状で告発され、死刑の宣告を受けて幽閉されていたのだが、老友クリトンから、不正の判決に対する反撃として脱獄をすすめられたとき、こう言っている。

「ぼくは、つねに、自分でよく考えてみて最善だと思われるような言論（ロゴス）以外のなものにも従わないような人間なのだから、これまでずっと語ってきた言論を、今ぼくにこ

のような災難が降りかかってきたからといって、投げ棄てることはできないのだ」（『クリトン』四六B四〇八）

「最善のロゴス」とは、十分に反駁的対話に耐え抜いたロゴスということであるが、こうして到達された結論は、たとえふつうの人間の感情からすれば投げ棄ててしまいたいような状況（たとえば、目前にせまっている死刑の恐怖）がおこっても、けっしてこれを放棄することはないということである。

では、この場合、その最善のロゴスとは何か。それは、「もつとも大切にしなければならないのは、生きることではなくて、善く生きることである」というロゴスであり、しかも、「善く」と「美しく」と「**II**」とは同じである」というロゴスである（四八B四）。このロゴスのうちに、人間の生の究極の意味についてのソクラテスの洞察が刻印されている。

すなわち、ただ生きつづけることは人間の生ではない。人間の生は人間らしい生でなければならぬ。それは「善く生きる」ということであり、これを言い換えれば「正しく生きる」ということなのである。人間を人間であらしめている根本的特徴はその倫理性にある。その余のあらゆる人間の生の意味づけは、この倫理性という土台に支えられてはじめて成立する。

（岩田靖夫『ヨーロッパ思想入門』による）
（問題作成のために、本文を一部省略・改変したところがあります）

問一 空欄 **A** **B** に入る語として、最も適切なものを次のア～オの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア もしくは イ しかも ウ では エ および オ つまり

問二 空欄 線部①「 」 に入りますが、ここに入る文章を自分で考えて答えなさい。

問三 線部②反駁的対話 とありますが、反駁的対話とはどのような対話ですか。文章から二つ抜き出しなさい。

問四 空欄 **I** **II** に入る言葉を、文章の中から抜き出しなさい。

問五 線部③理論理性に対する実践理性の優位を主張する革命的な思考の転換だったとありますが、「理論理性」と「実践理性」について、**A**さんは次の表にまとめました。

(1) 空欄 **あ** **え** に入る言葉を文章の中から抜き出しなさい。

(2) 空欄 **お** **か** に入るべき言葉をそれぞれ答えなさい。文章中の言葉を使ってもよい。

	理論理性	実践理性
文章中から	ソクラテスが牢獄から逃亡しないのは、 あ と い がこれこれの状態にあるからだ	いかなる判決であつても、 う のつとつて下された判決に従うことが え
私のまとめ	つまり、 お などに基づく考え方。	つまり、 か などに基づく考え方。

問六 同じく 線部③理論理性に対する実践理性の優位を主張する革命的な思考の転換だったとありますが、科学やテクノロジーが発達し、効率性を重視する現代は「実践理性より理論理性の方が優位」な時代になっているという指摘もあります。このような現代において、あなたはどのように生きていけばよいと考えますか。七十字以内で答えなさい。

〔二〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

次の週、チロはもつと具合が悪くなつて、ぼくは学校を休みたかつた。

「だめよ、学校を休むなんて」

お母さんのその言葉に、なんだよ、こっちの学校はもうおしまいにすればいいのにつて言つてたじゃないか！ つてぼくは頭に來た。

「真人。学校には行きなさい。チロはお母さんに見ててもらえばいいから」

お父さんも許してくれない。ぼくがいないあいだに、チロに何かあつたら、つて想像しただけで泣きそうになる。

ランチタイム、ノアにチロのことを話す。ノアはすつごく同情してくれて、マツト、大丈夫だよ、そんなことにならないよ、つて慰めてくれる。だけど、「犬だって人だって、いつかは死ぬんだよなあ」つてノアにのんびり言われると、また腹が立つてくる。ノアはチロが自分の犬じゃないから、そんなことが言えるんだと思つた。

「そんな言い方ないだろ！」

つてぼくはノアに向かつてどなつてしまふ。ノアがビクツとなつて、ごめん、マツト、ごめんな、つて必死になつて謝つてきたけど、いたたまれなくなつて、まだランチタイム終了のベルが鳴つてないのに、自分の教室に走つていつた。図書室の前を通り過ぎるとき、ケルヴィンとすれ違つた。お母さんに付き添われて、どこかに行くらしい。ハ―イ、マツト！ つてケルヴィンが声をかけてきたので、立ち止まる。どこいくの、つてきいたら、これからピアノのコンテスト、つてケルヴィンのお母さんがすぐわかりにくい英語で答えてきた。ケルヴィンがぼくをじつと見て、どうしたんだよ、おまえ、つてきいてくる。ノアとケンカした、つてぼくは思わず告白してしまふ。お母さんがいるのも忘れてケルヴィンが一步前に出て、なんでだよ、つてきいてくる。

ピアノのコンテストで優勝したら、ラブラドール犬を飼つてもらふケルヴィン。ぼくの犬が死にかけてるのに。

「優勝なんかしなきゃいい！」

ケルヴィンが面食らつた顔をした。

「ど、どうしたんだよ、マツト」

いつも顔色ひとつ変えないケルヴィンが、おどおどした感じになつて声がうわずつてゐる。となりのケルヴィンのお母さんまで、ダイジョウブ？ つておろおろしている。

ぼくは走つて逃げた。

その夜、チロはとても苦しうだつた。バスケットのなかから、ぼくのほうを見ているけれど、目もうつろ。ぼくはお母さんの作つてくれた夕飯が食べられなくつて、チロのそばから離れられなかつた。水を飲ませようとしても、口も開けてくれない。お母さんははじめぼくに、ご飯を食べなさいよつてうるさかつたけれど、ぼくが返事しないのでついに黙つた。

バスケットのなかのチロの顔を見る。チロがいなくなつたら、ぼくはどうすればいい？ ワトソンに行けなくて、東京に帰ることになつて、友だちもいなくなつて、中学の勉強にもついていけなくつて……。また、なにもかもやりなおしなきゃならない。チロがいれば、大丈夫なのに。こっちの学校でいじめられたときも、チロがいてくれたから、なんとか次の日もがまんできた。翔太や拓也に忘れられても、チロはずつとぼくの友だちでいてくれた。東京に帰れなくてもさびしくなんかなかった、チロからは東京のにおいがしていた。散歩して歩いたび、いい犬だつて会う人みんなに褒められて、日本のシバイヌなんです、つて答えるのが嬉しかった。ジマンだつた。人の心配がしたので振り向くと、お母さんがドアの外に立つていた。ぼくに気づかれないように、息を殺して、ドアの後ろに隠れるようにしていた。ぼくはもうたまらなくなつて立ち上がった。

た。

お母さん、獣医さんと呼んで、つてぼくは声にならない声で言う。

「まあくん、ほんとうにいいの？　チロ、もう少し、頑張れるんじゃない？」

お母さんの顔が青ざめていた。いい、決めたんだ、もう頑張らせたくない。苦しめたくない。眠らせてあげたい。お母さんは顔を強^{こわ}ばらせたまま、電話するためにリビングに行った。そうだった、お母さんは英語で電話をするのが苦手なんだった。ぼくはそれを思い出して、リビングに行った。案の定、お母さんは電話の前でじっとしている。ぼくはお母さんの脇から手を伸ばして、受話器を取り上げた。獣医さんにかける。うちの犬が病気で、もう眠らせてあげたいんです。住所はウェスト・ハンティングデール・ドライブ²⁹番地。オーチャード・クリーク。アンドウです。アンドウ。チロ、です。CHI・RO。ぼくはそこまで一氣に言い終えた。おうちの人にかわってくれる？　つて言われた。お母さんが出る。そうです。ありがとうございます。お母さんが受話器を置いて、あのかなしい目でぼくを見つめる。お母さんはその場にうずくまった。泣き声があがった。

獣医さんが来てくれたときには、お父さんも家に帰っていた。時間外の診察で、チロを病院でみてくれた人とは違う当直の先生だった。チロのカルテを見ながら、聴診器を当てる。

「よく、ここまでがんばりましたね。ご家族も、チロも」

「ほんとに、いいんだな、真人」

まだ背広姿のお父さんがぼくの肩に手を置いた。お父さんが鼻水をすすする音がきこえる。ぼくはチロを抱っこする。チロは、ぼくをまっすぐに見た。

「ぼくがいけないんだ！　東京から無理矢理連れてきて、だから病気になったんだ！　ぼくのせいだ！」

チロの背中に顔を埋めて、わあっと泣いてしまう。

「そうじゃない。もし日本に置いてきたとしたら、チロはきみがいなくて寂しくて、それこそ病気になるっていたかもしれないよ。犬にとっていちばんの幸せは、死ぬまで大好きな飼い主のそばにいることなんだ。きみは、最高の飼い主だ」

獣医さんはそう言つて、チロを眠らせる注射をした。チロはぼくの手をぺろとなめて、あとにはおだやかな寝顔が草原のように広がった。

次の朝、お父さんは早起きして、庭に穴を掘った。お気に入りだった茶色と赤のチェックの毛布に、お父さん、お母さん、お姉ちゃん、そして小さかったぼくがチロを抱っこして写っている写真を一緒に包んで埋めた。気がついたらいつもそばにいた。日本で生まれて東京と一緒に大きくなった。こっちにきてからも、日本のシバイヌなんです、つてぼくのたったひとつのジマンだった。昨日までのぼくも、チロといっしょに死んでしまった。

その日は学校を休んだ。今日は一日しっかり悲しんでおけ、そう言ってお父さんは会社に出かけていった。お母さんがランチにラーメンを作ってくれた。カップ麺じゃなくって、どんぶりに入っているラーメンなんて何ヶ月ぶりだろう。悲しくつてとても食べる気にならないと思つていたのに、湯気の立ったどんぶりを目の前にすると、無性にお腹が減ってきて、すぐに平らげてしまった。でもすぐに悲しくなってしまう。キッチンマットの上。テレビの前。庭のサンデッキ。どこを見回しても、もうチロはいない。

「ぼくのせいだ。チロは日本の犬なのに、無理矢理こっちに連れてきたから病気になったんだ。空気だって違う、食べ物だって違う、季節だって逆だ。恭子おばさんが預かってくれるつていったのに、ぼくが、ぼくが、悪いんだ」

目にまた涙があふれてくる。お母さんは一緒にラーメンを食べながら、うつむいた。たしかに、その土地にあったものつてあるのよね、お母さんが植えた椿も枯れちゃった。ここでも椿の花が

見られるかもしれない、なんて思って植えてみたんだけど。

「おかわりもあるわよ？」

今日はお母さんが優しい。お母さんにウソをつくのは一番苦手だけど、これからも、もっとつくような気がする。おかわりをもらう。

「お母さん」

なあに、真人。返事しながら、ラーメンにほうれん草と卵をのせてくれた。東京でしてきたのか、指の爪がピンク色に塗ってあって、桜貝みたいに恥ずかしそうだった。

「呼んだだけ」

ラーメンのスープを音をたててすすする。おいしい。へんな子ねってお母さんが苦笑いした。夕方、ジェイクが自転車であつてくれる。

「マットが休むなんてすぐめずらしいから、びっくりしちゃうじゃないか！ ケルヴィンもノアも、すぐく心配してたぜ」

ジェイクのお母さんとお姉さんたちが作ったビスケットをお見舞いにくれた。

「明日はいくよ」

ぼくがそこにいなくても、ぼくのことを考えてくれる友だちがいる。ノアにもケルヴィンにも、あんなにひどいこと言ったのに。明日、学校で謝ろうって思った。

夜になってお父さんが帰ってきて、チロのお墓の前に佇^{たたず}んでいた。

「真人。おいで」

呼ばれてお父さんのそばにいくと、お父さんは封筒をくれる。差出人がワトソン・カレッジになっていた。お母さんが台所で夕飯の支度をしているのを庭から確かめる。開けてみる、ってお父さんの目にうながされて、ぼくはおそろおそろ封を切る。中には何枚もの紙が重なり合ってい

た。紙を広げると、「ミスター・マサト・アンドウスカラシップ特待生（ESL生）合格案内」って書いてあった。お父さんとぼくは頭を寄せ合って、次の紙をめくる。「スカラシップ合格者のみなさまへ 入学許可書および学費免除項目」。三枚目は「ワトソン・カレッジ 入学オリエンテーション 日程と詳細（七年生）」。最後の一枚は「制服・学用品のリスト」。

「真人、やったな」

お父さんが押し殺した声で大はしゃぎする。きっと、チロが天国からいい知らせを届けてくれたんだなって、チロのお墓をまた見下ろす。ぼくは、嬉しいのかそうじゃないのかわからなかった。今日一日、お母さんはすごく優しいかった。ずっと優しいお母さんでいてほしい。でも、これ^③を見せたら、とんでもないことになると思う。

「どうしよう？」

「なに情けない声出してんだ、おまえは。ここに行きたいんだろう？ あんなにがんばったじゃないか？ 合格したじゃないか？ 見ろ、おまえは親孝行だぞ。授業料が半額になってる」

「ちがうよ、お母さんをどうしようかって言ってるんだよ」

お父さんとぼくはゆっくりふりむいて、フレンチドア越しにお母さんが料理している後ろ姿を見る。いいにおいがしてくる。あのおいは、八宝菜に中華風スープってとこだと思う。これはお父さんの大好物だ。

④「その話は、メシのあとにしよう」

お父さんはチロのお墓をしばらく見下ろして、ぼくの肩をぽんと軽く叩くと、家の中に入っていくた。

（岩城けい『Masato』による）

問一 Bさんは主人公真人の周りの登場人物を次の表にまとめました。表のⅠ、Ⅱ、Ⅲに当てはまる登場人物の名前を文章中から抜き出してすべて答えなさい。

友人	家族	
Ⅱ	母 父 チロ 真人	オーストラリア
Ⅲ	Ⅰ	日本
	お姉ちゃん	不明

問二 線部①お母さんの顔が青ざめていた とありますが、なぜ「青ざめていた」のですか。その理由を文章中の言葉を使いながら答えなさい。

問三 線部②ノアにもケルヴィンにも、あんなにひどいこと言ったのに とありますが、ノアとケルヴィンに言った「ひどいこと」をそれぞれ文章中から抜き出しなさい。

問四 線部③これを見せたら、とんでもないことになると思う とありますが、「ぼく」が考える「とんでもないこと」とはどのようなことか、文章中の言葉を使いながら答えなさい。

問五 Cさんはこの文章を読んで、真人のお母さんが最近日本に帰っていたのではないかと考えました。Cさんはなぜそのような推測したのですか。その根拠を文章中の言葉を使って、二つ答えなさい。

問六 線部④お父さんはチロのお墓をしばらく見下ろして、ぼくの肩をぽんと軽く叩くと、家の中に入っていた とありますが、このあと庭に残された「ぼく」がチロのお墓に話しかけます。あなたが「ぼく」ならどのような言葉を話しかけますか。チロに話しかけるように七十字以内で答えなさい。

三 次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文（文節で区切つてある）の主語と述語を記号で答えなさい。文中になければ「なし」と答えなさい。

- (1) この^ア中の^イ誰^ウよりも 高^エ得^オ点を とり^カたい。
(2) ひど^ハいなあ そんな^ニ難^ヒしい 注^セ文^エを する^ナなんて。

問二 下の意味を読み、□にあてはまる最もふさわしい言葉を、漢字一字で答えなさい。

- (1) 蓼^ア食^イう□も好きずき (意味) 人の好みはまちまちだということ。
(2) □のねずみ (意味) 囲まれて逃げることでできないこと。

問三 次の文を読み、線部を正しい尊敬語または謙讓語に直しなさい。

- (1) 母がそうおっしゃっている。
(2) 鈴木先生が着物を着る。

問四 次の作品の中から「高村光太郎」の著書を、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 智恵子抄 イ 一握の砂 ウ 方丈記 エ みだれ髪

問五 次の各文の線部を漢字に直しなさい。

- (1) せりふをボウヨみする。
(2) キヨウリに手紙を出す。
(3) オゴソかな鐘の音。
(4) 申しワケなく思う。
(5) エンガワで日をあびる。
(6) 燃料をホキユウする。

*印には記入しないでください。

受験番号	氏名
------	----

*

問六				問五		問四		問三		問二		問一	
				(2)	(1)	II	I					A	
				お	あ								
												B	
					い								
70													
				か	う								
					え								
60													

[illegible]

問五		問四	問三		問二	問一		
(4)	(1)		(2)	(1)	(1)	(1)		
							主語	
							(2)	述語
(5)	(2)						(2)	主語
(6)	(3)							



*